

---

# 赤いトンボが雪空を飛ぶ

戦場の見習い天使

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

赤いトンボが雪空を飛ぶ

### 【Nコード】

N6925Z

### 【作者名】

戦場の見習い天使

### 【あらすじ】

現代に残る大日本帝國。

世界最強の海軍を持ち、数々の戦いを勝ちあがってきた国。そんな大日本帝國がハルケギニアに転移してしまったら？

という仮想のお話がある一人のエースパイロットと『雪風』の異名を持つ少女を中心に描くお話。（だといいね本当に。）

基本的に気が向いた時にしか更新しません。

## 赤いトンボが雪空を飛ぶ プロローグ

大日本帝國海軍 第三艦隊旗艦 航空母艦紅龍

「艦長。敵航空隊は全滅しました。こちらの被害一部の機が被弾しただけです。」

敵飛行場への攻撃も成功しています。」

「そうか。よくやってくれたよ。これで朝鮮の空軍は軒並み壊滅。我々の勝利は近いな。」

「はぁ・・・艦長。・・・そういえば今日は・・・」

「クリスマス。か？そうだな・・・今日ぐらいは戦争やめにして祝わせてくれないかねえ。敵さんも祝いたいだろうに。」

「艦長って親バカですか？外、雪降っていますよ。」

「親バカで悪かったな・・・今日の飯は豪勢だよ。早く行こうじゃないか。」

「艦長。メリークリスマス。」

「メリークリスマス。」

誰かとこんなたわいない話をする。

戦争の中でも、こんな平和な日常だった。

俺の、まだ仲間がいて、親友がいて、まだ幸せだった時の記憶。

一年後。

この世界には航空母艦紅龍も、あの気さくな艦長も、たくさんの仲間も。

みんなこの世にいなかった。

朝鮮地方、中国は日本に降伏した。

だが、その日、ロシアとアメリカからミサイルが発射された。

全ての防衛、撃墜に成功するが、その日にロシアとアメリカは宣戦布告。

それから一年後。

激しい戦いを潜り抜けて、沢山いたはずの仲間は、守りたかった仲間、

この世からいなかった。

日本は戦争には勝った。

多大な賠償金、敵国のほとんどの軍備の禁止。そんな講和条約でさえ通ってしまうまでに敵国は打ちのめされた。

第三次世界大戦。

アメリカ、ロシアを筆頭とする連合軍は日本、ヨーロッパ勢、満州国などを筆頭とする枢軸軍に宣戦布告。大量の核爆弾が発射された。だが枢軸軍はそのほとんどを防御。

その後の作戦も、ワシントン・D・Cに発射された水爆や無差別爆撃によりアメリカに闘う力は残っていなかった。ロシアもまた同じ結果となった。

だがあまりにも最初に発射されたミサイルが多かったために核を運ぶための大型ミサイルを優先的に撃墜していった結果、小型ミサイルの撃墜が追いつかず、軍基地に突入する形となった。その結果、大日本帝國は沢山の兵力を失う形となった。

あのクリスマスの夜。

俺は目の前で、仲間がミサイルに直撃して木端微塵になるところを見た。

目の前で俺を尊敬していた仲間が撃墜されるのを見た。

俺の中の何かが壊れる音がした。俺には耐えられなかった。

俺が空母艦載機のパイロットから転属願いを出したのは、その年の内だったと思う。

そうして、撃墜機24機のエースパイロットは陸戦隊に異動となった。

あれから、何年が経つのだろうか。

一日一日が長く感じられる。

もしも俺があいつらに会えるのなら、最初に何を言うのだろうか。

その言葉が見つかるまでは。

俺の心が癒えるまでは。

また心から守りたい物が見つかるまでは。

俺はあのJ-20の操縦桿を握れそうに無い。

俺は近頃おかしい夢を見た。

知らない地で、道に迷い、どこかのゴロツキどもに絡まれ、それをぶった切っていく。

その国は日本じゃあなかった。

魔法があつて、バカみたいな身分制度。

普通ならすぐ忘れるはずの夢なのに、何故かその夢だけは頭からこびり付いて離れなかった。

起きて艦隊で定められている訓練をする。

走りこみ、腕立て伏せ、腹筋、背筋、射撃訓練。

へばる奴らがいる中、俺はその重いメニューを難なくこなす。

俺はやっぱ、あの夢の事を考えていた。

大日本帝國が太陽系第三惑星地球から消滅したのは、その一カ月後の事だった。

## 赤いトンボが雪空を飛ぶ プロローグ（後書き）

まだボカやっちゃった。

いつも連載している二作品に行き詰ったら書くみたいな話にしたいです。

## 赤いトンボが雪空を飛ぶ 設定資料

原発事故について

電力会社上層部、官僚、政治家の腐敗を国と国民と天皇陛下が許さなかった。

なので有事への対策もしつかりされた。

結果、事故は発生したものの、史実の東海村JCO臨界事故の事故程度の被害で済んだ。

その後反原発運動が繰り広げられることになるが、原子力に頼りきりな電力事情や転移でうやむやに。

東日本大震災について

史実通り。

地震発生の知らせを受けた軍はすぐさま東北に展開。後に述べる海上護衛隊、海軍による救助も行われた。なので若干死者が少ない。

国としての課題は、転移の対策の他に、東北の復興もあるので困るところ。

政治が史実の日本よりしつかりしているので、復興は史実よりは早いと考えられる。

軍について

帝國海軍は戦艦4、空母8、巡洋艦24、駆逐艦60、強襲揚陸艦24、潜水艦60を保有。

（掃海艇やら病院船とかは別）

何故戦艦が残っているかというと、艦体が大きいのでVLSとか沢山積めたり、イージス艦の強化版みたいな使い方をする。後男の口マン。

また、数年前から勃発していた戦争により海軍の主力艦が増えており、平時の今では戦力が多すぎたりする。艦隊は全部で6艦隊ある。艦上機はJ-20。

高望みな新技術はやめて、F-18にステルス性能を付加して、航続距離を伸ばした。武装もだいたいF-18と同じだったりする。

艦上ヘリは大体シーホークみたいなやつだったりする。

電子戦用に日本版E A-6みたいな物も搭載している。

空軍については、J20やA10神やらがいる。

陸軍は省く（何）まあ陸自とアメリカ陸軍を足して2で割ったような感じ？

あと日本国籍の艦船の護衛、日本周辺のパトロール、遭難者救助のために海上護衛隊が存在する。護衛艦は海保と何か似ている。速度なんかは違うけど。（拿捕を容易に行うため高速化している）優れた兵器であれば日本人にあわせた魔改造をされ量産。

史実がいろいろとおかしくなっている為日本がステルス機を開発してしまったりとか、中国の核保有が認められていないなどいろいろなご都合設定がある。

マスコミ

政府の抜き打ち検査だったりいろいろあったりする。だって機密情報垂れ流しにされたらアレなので。

左翼、共産主義者、在日は？

治安維持法の規則軟化版がある。

あと特高で取り締まったりする。

そのためそういう人間にとっては住みにくいかも。

日本国籍はそう簡単には取れない。当たり前だ。

満州国について。

史実どおり建国。

対アメリカ戦後のソ連戦に参戦している。

基本的に建国時と領土はほぼ同じ。

親日国の一つで、農業や鉱業などが盛んである。

最近では日本の高い技術力を持った企業の移転が進んでいる。

移転後の日本にとっては食糧の輸出などで以前より親密な関係になる。

人口は大体4億程度。

軍などは陸軍と空軍のみで、日本軍と装備がほぼ同一。（または劣化版）

海軍に関しては本編参照。

本当の話厄介な所として朝鮮半島を入れようと思ったが、問題解決してもあそこは存在自体（以下検閲により削除されました）

赤いトンボが雪空を飛ぶ 設定資料（後書き）

中途半端なところに入れてみる。

他にも何かございましたらお願いします。

1 2 ・ 2 5 色々と修正。

1 2 ・ 3 1 何かもう色々とボロボロ。また修正。

近頃これをもう少し詳しくしたものをうpしたい。

## 赤いトンボが雪空を飛ぶ 帝国海軍艦艇集

### 大和級戦艦

基準排水量 67,000トン 全長 280m 全幅 39m 速力 30ノット

### 兵装

50口径46cm3連装砲×3  
60口径15cm3連装速射砲×2  
64連装誘導弾発射装置×2（64セル、2基のVLS）  
四連装巡航ミサイル発射装置×2（ハーブーン、トマホーク）

### ク

20mm近接防衛火器装置（CIWS）×4

同系艦 大和、武蔵、信濃、紀伊 計4艦

第二次世界大戦で製造された戦艦。世界最後の現役戦艦であった。何回かの近代化大改修を行い、何とか現役で活躍中。老朽化が進んでいるため、退役が決定していたが転移で撤回。モデルは大和級の近代化版。

### 赤城級原子力航空母艦

基準排水量 122,000トン 全長 370m 飛行甲板最大全幅 85m 全幅 45m 速力 31ノット  
搭載機 120機

### 兵装

25連装近接防空誘導弾発射装置×2  
8連装対空誘導弾発射機×2  
20mm近接防衛火器装置（CIWS）×4

同系艦 赤城、加賀、蒼龍、飛龍、紅龍、翔鶴、瑞鶴、大鳳、鳳翔 計9艦

（ただし紅龍は戦没）

元々1990年代に従来の空母の更新用として翔鶴まで製造された。  
（前期型）

だが紅龍の沈没などで新造や欧米への増援のための戦力の増加が必要となったため、

さらに3艦を製造。（後期型）

戦争終了後他国に一部を譲渡する計画もあつたが転移でうやむやに。  
モデルは仮想戦記に出てくる空母やいろいろと。

愛宕級巡洋艦（新愛宕級）

基準排水量11000トン 全長190m 最大幅18m 速力

33ノット

搭載機3機

兵装

60口径127mm汎用速射砲2基

64連装誘導弾発射装置×2（64セル、2基のVLS）

四連装巡航誘導弾発射装置×2（ハーブーン、トマホーク）

20mm近接防衛火器装置（CIWS）×4

三連装短魚雷発射管改×2

同系艦 古鷹、加古、青葉、衣笠、妙高、那智、足柄、羽黒、高雄、

愛宕、摩耶、鳥海、最上、三隈、鈴谷、熊野 計16艦

利根級の老朽取替として投入。速度の向上や防空性能の強化が図られている。

モデルはタイコンデロガ級の拡大版。

利根級巡洋艦（愛宕級巡洋艦）

基準排水量10000トン 全長173m 最大幅17m 速力

30ノット

搭載機1機

兵装

60口径127mm汎用速射砲2基

四連装汎用ミサイル発射装置×5（ハーブーン、トマホーク等）

20mm近接防衛火器装置（CIWS）×2

三連装短魚雷発射管改×2

同系艦 利根、筑摩、金剛、比叡、榛名、霧島、扶桑、山城 計8艦  
航空機戦術や技術などは日進月歩の勢いで進歩しており、艦隊の防空を図るため開発された。だがより高性能な新型巡洋艦への更新が進んでいる。

モデルはバージニア級。

天龍級強襲揚陸艦

基準排水量32,000トン 全長 205m 全幅 38m 速

力33ノット

搭載戦力 主力戦車10両 歩兵戦闘車20両 自走砲10両 非

装甲車90両 陸戦隊1300名

搭載機数 30機

兵装

25連装近接防空誘導弾発射装置×2

8連装対空誘導弾発射機×2

20mm近接防衛火器装置（CIWS）×2

同系艦 天龍、龍田、球磨、多摩、北上、大井、木曾、長良、五十

鈴、名取、由良、鬼怒、阿武隈、川内、神通、那珂、夕張、阿賀野、

能代、矢矧、酒匂、平戸、大淀、仁淀 計24艦

従来の揚陸艦より速力が高く、輸送量も多い。だが航空機の搭載量では劣る。

モデルはワスプ級。

夕雲級駆逐艦

基準排水量 4,500トン 全長 15.3m 全幅 16m 速力 31ノット

搭載機 1機

兵装

60口径127mm汎用速射砲×2

高性能20mm機関砲(CIWS)×2

単装対空誘導弾発射機×1

4連装巡航誘導弾発射機×2

8連装対潜誘導弾発射機×1

3連装短魚雷発射管×2

同系艦 夕雲、巻雲、風雲、長波、巻波、高波、大波、清波、玉波、

涼波、藤波、早波、浜波、沖波、岸波、朝霜、早霜、清霜 計18艦

利根級と同時期に開発された汎用駆逐艦。装備の陳腐化が進んでいるが、船体が小型なため更新する余裕が無いため、今後取替が進むと思われる。

はつゆき型がモデル。

秋月級駆逐艦

基準排水量 5,200トン 全長 15.8m 全幅 16.6m 速力

32ノット

搭載機 1機

兵装

60口径127mm汎用速射砲×1

高性能20mm機関砲(CIWS)×2

4連装対空誘導弾発射機×2

4連装巡航誘導弾発射機×2

8連装対潜誘導弾発射機×1

3連装短魚雷発射管×2

同系艦 秋月、照月、涼月、初月、新月、若月、霜月、冬月、春月、  
宵月、夏月、花月 計12艦

こちらは艦隊の防空を主任務としている。装備が一部変更されており、若干速度が増加している。  
はつゆき級の拡大防空版。

#### 陽炎級駆逐艦

基準排水量 7000トン 全長 161m 全幅 18.7m 速力 3

3ノット

搭載機 3機

兵装

60口径127mm汎用速射砲×2

高性能20mm機関砲（CIWS）×2

64連装誘導弾発射装置×1（64セル、後方）

32連装誘導弾発射装置×1（32セル、前方）

四連装巡航誘導弾発射機×2

8連装対潜誘導弾発射機×1

3連装短魚雷発射管×2

同系艦 陽炎、不知火、黒潮、親潮、早潮、夏潮、初風、雪風、天津風、時津風、浦風、磯風、浜風、谷風、野分、嵐、萩風、舞風、島風、妙風、清風、村風、里風、山霧、海霧、谷霧、川霧、山雨、秋雨、夏雨 計30艦

防空性能の向上や吹雪級や夕雲級の置き換えのために導入された。艦隊防空のために新愛宕級で開発した最新技術を流用している。速度、防空性能などは他の駆逐艦を圧倒しているが、駆逐艦にしては値段が結構高いため駆逐艦全ての置き換えには至らなかった。モデルはこんごう型。

赤いトンボが雪空を飛ぶ 帝国海軍艦艇集（後書き）

何かいまいち。

## 赤いトンボが雪空を飛ぶ？

2012年3月12日5時31分。

大日本帝國は突如地球上から消滅した。

同時に満州国、帝国の植民地として統治していた南洋諸島も消滅。いつの間にか海になっていた。

外洋に出ていた大日本帝國国籍、満州国国籍の船舶、艦隊も消滅。日本や満州国に寄港していた外国の船舶まで巻き込まれ姿を消した。

始まりは地球のほぼ全域で観測された震度3程度の地震だった。

特に大した被害などは無かった。

だが、その時から満州国、南洋諸島、国内以外の通信回線が不通となった。

外洋に出ていたはずの船舶がいつの間にか日本本土に戻っている。

ちなみにパソコンなどのサーバは有事にインターネットなどへのサイバー攻撃時の際に国の事業で定期的に上書き保存されるデータを使用したものでそのままの状態だった。

そのため一部の人々は異常に気付いた。

インターネットの動画投稿サイトなどで海外からの更新や通信が突然止んでしまったのだ。

そして海外にかけたはずの電話もかからなくなったのだ。

異常事態として政府に報告され、政府の調査が始まったのだ。

そして海外（満州国以外）との連絡が完全に取れないというや、GPS衛星の通信の不通が判明し、日本政府が声明を出したのはそれから5時間後。

「満州国、日本本土、南洋諸島以外の連絡が取れない状態になっている。」

GPSも使用できなくなっている。これには何らかの理由があると

思われる。

大日本帝國軍は今後起きる可能性のある暴動の阻止や他地方との連絡に努めよ

帝國臣民、満州国民の皆様は普段どりの生活を冷静かつ出来る範囲で行うように」

日本人たちの行動はいたって冷静だった。

学校ではいつものように授業が行われ、一部の会社なのぞく会社では不通のように業務が行われた。

政府は近辺の状態確認のために大日本帝國海軍第三艦隊、第四艦隊、第五艦隊、第六艦隊が出港。

資源の備蓄状態や満州国や南洋諸島で取れる資源の確認などが行われ、元々2012年3月に打ち上げられる予定だったGPS衛星の完成を早めて出来るだけ早く打ち上げることに決定した。

外国人たちは暴動を起こそうとしたが、特高に取り押さえられた。結果、ほとんど何事も無かったような生活になった。

だが首相官邸では、日本や満州国を取り巻く厳しい現実が明らかとなった。

資源の備蓄は昔からやっていることで、原油、石炭、天然ガスの備蓄は国内消費量の一年分。その他資源で特に重要な鉄やゴムなどは半年、その他の資源も三ヶ月分はあった。

だが食料はどうしようもなかった。昔より自給率は上がっていたがさらに原子力発電の増強や自然エネルギー発電の増加で電力は増えたといえ余裕が無い。

資源だって逆を言えばそれくらいしかないということになる。

つまり、大日本帝國の滅亡までのタイムリミットは、長く見積もって二ヶ月ということになる。

そして、現在大日本帝國や満州国がある位置についてもとんでもないことが発覚した。

「異世界に転移！何故そのようなことが起こるのかね？」

そう聞くのは内閣総理大臣の加地貫太郎である。

専門家が言うには、地球上の大気とはCO<sub>2</sub>や排気ガスの量が違うこと、日本の位置の磁場などの乱れなどから、大日本帝國は異世界に転移してしまったのではという予測が立てられた。

そして、その決め手となったのは海上護衛隊からの通信だった。

「海上護衛隊から入電です。『我、コレマデ陸が存在シナカタ位置ニ謎ノ大陸ヲ発見セリ』」

次の日、大日本帝國、満州国は、次の事を発表した。

- ・大日本帝國本土、大日本帝國沖縄台湾地方、大日本帝國南洋諸島、満州国は地球ではない別の場所に転移した可能性が高い。
- ・海上護衛隊は謎の大陸を発見した。
- ・資源、食糧の備蓄が少ないこと。
- ・謎の大陸については、その方角に向かっていた大日本帝國第三艦隊の艦載機を使用して偵察を行う。戦闘はできるだけ控え、危険が無いようなら陸戦隊の上陸を行って調査する。
- ・満州国の国境で海に面しているところが出てきたため、解体待ちの駆逐艦などを使用して急遽海軍を創設する。

さすがに日本は大混乱になった。政府からの声明にマスコミもこぞって取り上げた。

だが、これは大日本帝國、満州国、そしてハルゲギニアを揺るがすとてもない出来事の全ての始まりに過ぎなかったのだ。

## 赤いトンボが雪空を飛ぶ ？（後書き）

いわゆる導入編というところです。

主人公が出てくるのはもう少し先になりそうです。

追記 読者様からのご感想の中に「朝鮮半島いらないだろ」という感想があつたのですが、完全な誤字です。申し訳ございません。

## 赤いトンボが雪空を飛ぶ？

「司令。では訓示をお願いします。」

声をかけられる黒い髪をした長身の男。

彼の名は石嶺 日向。若くして第三艦隊司令長官となった海軍少将である。

「全く・・・面倒くさいなあ・・・」

そう言つて壇上に進み出る。

でも、彼の目は決して面倒くさそうな目ではなかった。

「君たちに問う。君たちはこの国が好きか？」

そう問うと、はいと言う大きな返答。

「そうか。今、大日本帝國は存亡の危機に瀕しているのは君たちもご存知の通りだ。

ここで我々がやらねば、皇国は飢え死にする。

君らの大切な人も、俺の大切な人もだ。

俺たちがやらないとこの国は救えない。

君らがこの国を救うのだ。

例え何があるうとも、責任を持ち、帝國海軍の誇りを持って、礼儀正しく、そして、世界最強の船乗りの力を世界に示せ！

長い話は嫌いだ！以上にする！」

普段とんでもない怠け者そして面倒くさがりやで有名な石嶺だったが、この日は違った。

まるで覚悟を決めたような、肝の据わった目。

そしてそれに共鳴して、第三艦隊の士気は最高潮に上昇する。でもそれが終わったとたんに面倒くさい面倒くさいと言っていたのは司令部だけの話。

数日後、第三艦隊は謎の大陸から大体75kmの所に来ていた。航空母艦飛龍の会議室では、今後の会議が行われていた。

「司令。我艦隊の任務は大陸の視察であります。ここで停泊して、偵察機を出すことを進言します。」

海軍に入ってから数十年がたつであろう白髪の人。第三艦隊参謀長、沢井が提案する。

「まあここいらでいいだろう。偵察機を発艦させよう。」

第三艦隊の旗艦、赤城級空母飛龍から偵察隊が発艦する。

赤城級空母は皇紀2652年から製造された世界最大の原子力空母。艦上機を120機も搭載することが出来、122・000トンの排水量を持つ。

飛龍の他に赤城、加賀、蒼龍、翔鶴、瑞鶴、大鳳、鳳翔と8艦が存在する。

ちなみに紅龍が同系艦として存在していたが2010年の第三次世界大戦時の開戦後すぐのミサイル攻撃により沈没している。

偵察機は編隊を組むと、西の方角へ動き出した。

「機長。暇ですね・・・」

偵察機の乗員。

「そんなこと言っちゃあかんよ。俺たちの偵察結果次第でうまくいけば皇国が救われるのだろう?」

別の乗員が声を上げる。

「前方向に陸地が視認できます!」

そこには黒い砂をした砂浜が見えてくる。  
奥には森がある。

ヘリは方向転換して陸地へと向かう。

「ここが・・・」

少しずつ近づいてくる陸地。

だが、彼らはとんでもないものを目の当たりにした。

「見てください!下に・・・豚でしょうか?いや豚にしては少し大きいですね。」

「こちら飛龍偵察機隊、謎の大陸に正体不明の生物を確認。調査を続行する。」

偵察機隊は生物の画像を撮影して別の箇所を調査する。

しばらく飛んだところだろうか。

「三時方向に村でしょうか?建物が見えます。」

「うむ。だが良く見てみる・・・」

「残骸ですね。何かに流されたのでしょうか・・・」

「もう少し低く飛んで人がいないか調べるぞ。」

低空飛行に移る。人の姿は全く確認できない。

「仕方ないな・・・元の高度に戻り方向を転換するぞ。」

方向を転換して、飛行する。

数時間後、町が見えてくる。

「前方に町を確認！この大陸には・・・」

「文明があり、人が生活しているか。」

「町を調査するぞ。」

高度を下げる。町の中にいる人は驚いて上を見ている。

服装は中世のヨーロッパに似ている。文明もそのくらいだ。杖を持っている人もいる。

だが、事件は突然起こった。

「機長！前方向に火の玉が一つ飛んできます！」

突然火の玉が飛んできたのだ。

「回避するぞ！全く！ここはどこのファンタジー世界だよ！」

何とか回避に成功する。だが次から次へと火の玉が放たれていく。

慌てる偵察隊。

「高空へ上がるぞ！」

「こちら飛龍偵察機隊。人間の町を発見。文明はヨーロッパ中期レベルかと思われる。

町にて攻撃を受けり。火の玉が飛来したが回避し、被害なし。報復射撃の許可を求む。」

へりが動きながら母艦に連絡する。  
しばらくして返答が帰ってくる。

「こちら飛龍。報復射撃は許可できない。直ちに母艦に帰投せよ。」

通信員からそのように言われる。  
残念そうな顔をして機長が言う。

「そうか・・・こちら1番機。全機反転。母艦に帰投する。」

だが試練はそれだけではなかった。

「こちら4番機！後方より飛行物体飛来！」

## 赤いトンボが雪空を飛ぶ      ? (後書き)

何か俺って気が向いたときと気が向いていないときの執筆スピードが違いすぎるような気がする。

別に書いている小説の更新をするので更新はまた今度になりそうです。と思ったけどすぐ書いてしまっている件について

## 赤いトンボが雪空を飛ぶ？

空母飛龍の艦内のどこには、ピアノが置いてある部屋がある。少しの人物しか知らない、秘密の部屋。

ピアノの他には数個の椅子とテレビとDVDレコーダー位しか置いてないその部屋のピアノからは、いつもある曲が流れる。

悲しくて、綺麗な曲。

彼は、人が来ているのに気付かず、その曲を弾き続けていた。

やがてその曲が終わり、彼がこちらに気付く。

長い金髪に綺麗な顔立ち。だがその目はなんだか悲しげで。

彼、谷澤勇樹がこちらに気付き、敬礼をする。

石嶺は答礼をすると、話し始める。

「谷澤。またここに居たのか。」

「悪いですか？」

「まあ別に悪くは無いが・・・このままじゃあこの海軍の七不思議になるぞ？」

「どういう？」

「航空母艦飛龍にいつも同じ曲をピアノで演奏している亡霊が居るって。」

「亡霊・・・ですか。まあこんな秘密基地みたいなところから流れてきちゃあ誰もわかりませんよね。」

仕方が無いだろうと言った顔で彼は笑う。

「またその曲か・・・それに何時までもあの事を考えていたら・・・」

「『前に進めない』ですか？その言葉は耳にたこができる位聞きましたよ。司令。それに・・・」

「『いつかは直る』だろ？その何時かは何時なんだよ・・・若葉のやつはもう直りやがったのにさ。」

「あの人は能天気すぎます。それに司令はあの人に甘いですよ。カップルじゃあるまいし。死亡フラグが立ちますよ。」

「まあ・・・家族だからな。」

「さてと・・・何の用ですか？」

「特に何も。曲を聴きに來ただけだ。」

「そんな人に聞いて貰えるほどうまくは無いと思います。」

そんな小さい用なら來ないで下さいと言いたそうな顔をして言う谷澤。

「謙遜するな。俺は十分うまいと思うがな。」

「まあ、あいつが聞いたら、『まだまだ』と言われそうですね。」

「はぁ・・・菅原はそれほどピアノにうるさかったのか・・・」

続ける石嶺。

「後。偵察隊が何もないと言えば、3、4日後に大陸に上陸する。お前も付いて来い。」

「それを先に言いましたよ。というかそれが用なんじゃあ・・・」

部屋を出て艦内通路に出る。しばらくすると、伝令がやってくる。

「何やっていたんですか司令！緊急事態です！」

「何だと！」

「言わんこつちゃ無い。司令頑張れー」

嫌な顔をして棒読みで言う谷澤。

「谷澤、後で呼び出し。司令室に。さて行くぞ。」

「中尉はもういませんよ。司令。お気の毒に。」

いつの間にかに逃げてしまった谷澤の事を指して笑いながら言う。

「伝令。お前もだ。後で呼び出しておけ。」

伝令が『えっ』というがときすでに遅し。

急ぎ足で歩く二人。

「あれは・・・竜？」

飛龍偵察隊では、突然現れた何匹もの赤い生物に驚く。  
竜のような赤い生物の上には騎士が乗っていた。  
赤い竜は炎を吐いてくる。

「炎を吐いてきました！どうやら、撃墜する気です！」

「回避しろ！正当防衛だ！仕方ない！こちら一番機！火器の使用を  
独断で許可する！」

ブローニングM2機関銃が敵竜に向かって構えられる。

「メドウーサの発射準備終了！撃てっ！」

ブローニングM2機関銃が毎分850発の勢いで弾を吐き出す。

竜は血を吐いて落ちていく。

騎士に弾が掠めると、騎士の片腕は無くなっていた。

あっという間に2匹の竜を撃墜する。

他のヘリも攻撃を始める。

仲間たちがあっという間に落ちていくのを見て、竜たちは怖気付いたのか撤退を始めた。

「竜たちが撤退していきます。」

「こちらも撤退するぞ。」

だが水色の竜がこちらを追ってくる。なんだかさっきの赤い龍より  
早そうな龍だ。

「あの竜はどうしますか？」

おそらく追跡する気だろう。

もし母艦の位置を嗅ぎ付けられたら・・・

「仕方が無い。撃墜しろ。」

ヘリが射撃を再開し、水色の竜は血を吹いて騎士と一緒に地面に落ちていった。

「これで追手も居なくなった筈だ。」

そして、偵察隊は母艦へ戻っていくのだった。

「なるほど・・・そのようなことがあったとは・・・」

呟く石嶺。その横には谷澤と伝令が正座させられていた。

「まあいい。偵察の結果人間が存在し、正体不明な生物の存在、文明の件、そして、国が存在すると言うことか・・・」

「まあ、そういう風に考えたほうがいいですね。」

もう足がしびれたんだと言いたそうな顔をしながらそう言う谷澤。

「厄介だな・・・領海の侵犯、さらに領空の侵犯か・・・」

完全に正座の件は無視して言う。

「上陸の件はどうするんだ？」

尋ねる谷澤。

「変更はしない。だが、もしもの時・・・」

「その場合はその国に攻撃を加えることが出来るように準備しておけ。さてと、上陸準備だ。偵察隊は野営や上陸に適した場所を探してくれ。」

こう言った石嶺は、こう一言付け加えるのも忘れなかった。

「あ、その二人はあと一時間このままな。」

二人はこの世の終わりのような顔をしてお互いを見つめた。  
後で司令室が出てきた二人が歩けないくらいにフラフラだったのは言うまでも無い。

赤いトンボが雪空を飛ぶ      ? (後書き)

ピアノの曲は「戦場のメリークリスマス」です。  
メドゥーサーII ブローニングM2重機関銃の別名です。

## 赤いトンボが雪空を飛ぶ？

私はおかしな夢を見た。

おかしな格好をした人が貴族に決闘を挑むという夢。

きっと任務のし過ぎなんだろう。

普通なら忘れてしまう夢が、何故か頭の中から離れなかった。

部屋の中で本を読んでみるが、何故か本の内容が頭に入らない。

せつかくの虚無の曜日なのに。

どんどんドアをたたく音がする。

うるさい。読書の邪魔になる。

『サイレント（消音）』

これでゆっくり本を読めるかと思った。

でも現実はその甘くは無い。

ドアが開く音。『アンロック解錠』を使ったらしい。

音は聞こえないけど、彼女の言いたいことは大体分かる。

どうせ、相手を見つけたから着いてこいだとか、そんな感じだろう。

でも、数少ない親友の頼みを無視することは出来ない。と考えてい

たら、本を取られた。

仕方が無いので、呪文を解く。そうしないと本は返してもらえないだろう。

「タバサ！行くわよ！」

本を返される。

どうせまた相手を見つけたのだろう。

それでその相手が遠いところに行ってしまったのだろう。

「・・・また着いて来い？」

聞いてみる。するとキュルケは、

「そうだけど？」

それはどうにかならないのか。私の貴重な時間がガラガラと音を立てて崩れ去っていく。

「・・・何処まで行くの？」

「トリスタニアまで。」

あんな遠いところまで・・・面倒だ・・・

「はあ・・・GPSなんかあったら助かるのになあ・・・」

例の秘密の部屋でばやく石嶺。ピアノの席に座る。

「測量だってそう時代遅れな技術じゃあなかったと思いますけど・・・それに無いものねだりしたって・・・」

椅子を全て占領して寝転がった状態の谷澤が答える。

「勇樹もにーにもずるい！私にも椅子よこせ！」

椅子に座ることが出来ず壁に寄りかかる黒い髪の美人。彼女は石嶺の妹、若葉。

「「お気の毒ですー」」

二人の心が一つになる。もちろん棒読み。

「二人共地獄に落ちろ・・・」

泣きそうな声で言う若葉。

「さてと・・・作戦書によると作戦決行は明日か・・・」

何事も無かったように作戦書を読み上げる石嶺。

「上陸位置は北東85km、上陸兵力は1000人か・・・」

「それに司令と護衛・・・はぁ・・・俺も行くのか面倒くさい・・・」

「

ばやく谷澤。

「二人とも賊に襲われて死んじまえ」

「若葉。もうここまでにしておけ。これ以上は呼び出したぞ?」

『呼び出し』という言葉で黙りこくる若葉。

「作戦によると揚陸艇で歩兵を積んだ歩兵輸送トラックを揚陸させて、道を進むと。」

その後町があれば情報の収集を行って、国や町の代表者やここら辺の地理を聞きだすと。

いざとなつたら戦闘。謎の生物や火の玉の件もあるからな・・・油断はしないで欲しいな。」

「文明が無かつたら上陸後の道の敷設も自分でやらないといけないからね。楽でいいよね。」

道が無ければよかったのという顔をする若葉。

「まあ、そううまくはいかないだろうし、いったとしてもこの身なりじゃあな・・・」

白い士官服を指して呟く谷澤。

「そんな中世の服を短時間で作る化け物じみた能力はこの艦隊にはないよ。お気の毒に。」

若葉が棒読みで話す。

「帝國海軍の七不思議にどこかの艦隊に棒読みでとんでもないことを棒読みで呟くやつがいるって噂が・・・」

この人たちの相手は出来そうにない。速攻で部屋から出る。

向かった先は、航空機の格納庫。

そこには、ヘリやJ20が所狭しと並んでいる。

谷澤は整備器具を持つと、整備員の仲間たちと航空機の整備を始めた。

数十分経つと、ほぼ全ての航空機の整備が終わり、整備員たちは自分の部屋に戻っていく。

基本的に上官である谷澤は最終確認を終えると、ある戦闘機の所に

歩く。

その飛行機には尾翼に赤いトンボのマーク。撃墜数を表わす赤い星。主翼には日の丸。

普段全く飛んでいないにもかかわらず、そのJ20は他の航空機のように綺麗に整備されていた。

「全く・・・こいつが飛ぶ日は何時来るのだろうな・・・」

彼は自虐的に笑うと、格納庫を後にした。

## 赤いトンボが雪空を飛ぶ      ? (後書き)

次話に上陸して、その話のうちかその次にある原作キャラとの遭遇をしたい。

## 赤いトンボが雪空を飛ぶ？

トリスタニアの王城。

トリステインの枢機卿マザリーニは、豪華な家具のある部屋で、ある知らせに頭を悩ませていた。

ある領主の館の近くで、西からやってきたと思われる見たこともないような奇怪な竜がやってきたという。

その竜は羽ばたいていないのに飛び、その上攻撃に來た火竜騎士団を壊滅させ、追跡に來た風竜騎士団まで壊滅した。

生き残りの話では、その奇怪な竜の中にある黒い棒から出される弾で、氣付いた時には騎士も竜も粉々になって落ちていったという。

下手したらその国と戦争になってしまう。

そうになると、また国の財政は傾いてしまう。

それどころか、衰退したこの国の国力では勝つのは困難。

謝りに行くとしても、それが何処にあるのか分からない以上、謝りにいけるわけがない。

後、西海岸のほうで、津波があつたという。被害は大きいらしい。

これで復興のためにさらに財政が苦しくなるかと思うと、頭が痛くなる。

もし貴族の伝統や誇りとやらで飯が食えるのなら、この財政もいくらは楽になるのだが・・・

作戦決行日の朝になった。

天気は良好、波もそれほど高くはない。

ヘリが周辺を哨戒する中、揚陸艦から上陸用の舟艇が吐き出される。中には兵士を載せたトラック。舟艇は砂浜に乗り上げると、トラックを吐き出して揚陸艦に戻っていく。

上陸作業は一時間もかからなかった。

そのころには、1000人の海兵隊と司令部、武器やヘリ、補給物資が揃っていた。

「海兵隊に敬礼！」

第三艦隊乗員は、離れ行く海兵隊に向かって敬礼をする。

海兵隊も、乗員に敬礼をする。

それは、絶対に帰ってくるという誓いのように見えた。

海兵隊は、道をまっすぐに進む。

何十台ものトラックがぞろぞろと蛇のように。

海の向こうに見えていた艦隊は陸から離れてゆく。

これは、艦隊を民間人に見られることを防ぐためである。

数時間後、海兵隊は野営できそうな平地を見つけると、テントやプレハブを組み始めた。

建設作業がある程度落ちついた時に、周辺の町への偵察部隊が出発した。

だいたい小隊規模の偵察部隊の中に、なぜか艦隊の司令である石嶺と谷澤。

町に行くなと念を押されていたはずだが、石嶺が行くといって聞か

なかった。

こんな提督が有事の時にはとんでもなく頼れる艦隊司令になるのだから驚きだ。

そして、兵士はいつもこの人に振り回される司令部にならなくて良かったと心から思ったという。

「それにしても、この世界は空気が綺麗ですよね・・・」

ブロロロロ・・・という音と白い煙が吐き出される。

道の上を走るトラックの中で谷澤が呟く。

「排気ガスとは無縁だしねえ・・・おまけに地球温暖化なんて言葉誰も知らないから。なんか故郷を思い出すな・・・」

と、栗色の髪をしたポニーテールの女性、諏訪が話す。

自分の故郷。それを思い出すと、谷澤は胸が痛くなる。

1年前のあの日。実家に休暇をもらい帰省していた時に、あの地震は起きた。

一瞬で日常が崩れ去った。

そして、家族と一緒に高台に逃げている途中、あのどす黒い波が・・・

あれからの事は、あまり記憶に残っていない。

確かだったことは、俺は大切なものを何一つ守れない無力な存在だということ。

俺は家族も故郷も帰る場所も失ったということ。

と、色々考えていると町が近づいてきたようだ。  
向こうに見えるいかにもヨーロッパ風の町。

さすがにヨーロッパ風の服装は無かったので、このままの服で行くことになった。

絶対に変な目で見られるでしょ。と谷澤は思う。

「ではこれより情報収集を開始する。班に分かれて聞き込み調査しろ。また何らかの危機に陥った時を除き武器の使用は禁止する。」

さて、これからあの司令が織り成す悪魔のような物語が待っているのと思うと、胃が痛くなる。

これまで外国などに司令と一緒に行った任務の回数57回のうち厄介ごとに巻き込まれた任務の回数実に46回。

中でも一番ひどかったのはアフリカで夜司令と一緒に出歩いていた時に夜盗に取り囲まれ誘拐され数日間小屋の中に閉じ込められ命からがら逃げ出した事。

早くキャンプに帰りたい。できることなら飛龍まで帰りたい。お願いだから。

だがそんな谷澤の願いもむなしく、石嶺に同行を命令されることとなったのだった。

赤いトンボが雪空を飛ぶ      ? (後書き)

谷澤って本当に不運ですね。

私生活でも仕事でも。

書いている俺までも不憫に思えてきた。

巻き込まれる確率約80%・・・

## 赤いトンボが雪空を飛ぶ？

どうしてこうなった。

必然ともいえるこの状況。

なんでこの人と一緒に居るとトラブルが起きるのか。  
よりにもよってこんな大切な時に。

事の顛末を簡潔に報告する。

町に行く途中に、何かの荷物を持った緑髪の女性にあの憎たらしい司令が偶然ぶつかってしまい、その荷物が落ちると。

その中には金貨やら銀貨やらいろいろと。まあびっくり。

その女性が案の定気付いて何故か知らないがこちらを始末しようとしてでかくてとんでもない化け物を繰り出してきた。

んで、この状況と。

完璧に司令が悪い。偶然でも故意でも司令が悪い。そしていつも俺が苦労していることに気付かない司令。ここまで来ると完全に憎いとか嫌いを通り越してしまう。

おそらく30m程度あると思われるその化け物。

その肩の上にあの女性が乗っている。

外見からして銃は効かない。効くわけがない。

対戦車兵器なんて便利なものは残念ながら持ち合わせていない。  
でも偵察部隊はいたって冷静。やっぱり実戦経験者はすごいね。

え？あのバカ司令は？

子供みたいな目でこんなファンタジー展開があつたのかと大興奮。  
お前ももう少し危機感持て。

この場合どうすればいいだろうか。

あの化け物の手足で潰されたらまず終了のお知らせが来る。さつきも思ったが銃が効くとは思えない。

そしてこの場合上にいる女性はできるだけ無力化したい。となった時、あそこから落ちたらまず助からないということは容易に予測できる。

話を通じる相手でもなさそうだ。

ポケットの中に何故かスタングレネードが一つ。

叩いても二つになったりはしません。

とりあえず手に持つ。

叫んでおけばある程度の対策はしてくれそうだ。

だって耳栓と対閃光ゴーグルは携帯されているはず。

「スタングレネード使うぞ！」

大声で叫ぶ。

それを聞いた隊員たちは耳栓と対閃光ゴーグルを装着していく。もちろん俺も装着。

スタングレネードのピンを思い切り抜く。

そして俺はそれを、女性が立っている上空までぶん投げた。

女性のもとに飛んでいくそれは、目も眩むような閃光ととんでもない音を発生させた。

やっぱり装備をつけていても目が眩しいし、耳がうるさい。

女性は倒れて気絶している。まあ無理も無い。あんな凶悪兵器使われたのだから。

偵察は中止。女性は、金だとか銀の荷物と一緒にトラックに運んでおいた。

基地に帰ったら色々聞き出して、それが終わったら解放する予定だ。

利用できそうなら最大限利用する。俺ってひどい。

これで58回中47回。確率約81%。泣いていい?というか泣く。帰ったらいろいろと聞き出す仕事もあるし・・・  
はぁ・・・自分が惨めになつてきたよバカヤロー。

キングクリムゾンして基地に戻ってきた。すっかり書かない作者のバカヤロー。

さて、これから始まる面倒くさい仕事をどうやって終わらせようかとあえずテントの中に女性を寝かせておく。  
なんかすーすーと寝ている。

寝ている時はあの極悪司令も普通の人間に見えるからあら不思議。諏訪さんに女性の監視を任せる。

こういうときには女性同士のほうがいいのではと思つたからだ。

で俺は何をするか?始末書作り、書類処理、石嶺のバカヤロー。

先ほどからバカヤローバカヤローばかり言っている。

はぁ・・・すぐ自分が惨めになつてきたよ・・・

俺はいつもの二倍の早さで仕事を終わらせると、自分のテントに戻るのだった。

首相官邸では、第三艦隊からのある報告に頭を悩ませていた。

「人間が存在し、文明がある・・・しかも魔法という馬鹿げたものが存在するか・・・」

一人の科学者が呟く。

「これで異世界の開拓は不可能か・・・現地住民と交渉するしかない

いのか・・・」

加地が心配そうに言う。だが加地は昔からの経験や人間の性質で知っていた。

特別な力を持つものは、それを持たない者に対して軽蔑する。

そうだった以上対等での交渉をしようとしな

それなら侵略も手の一つであるが、大義名分なしの侵略を国民が許すと思えない。

そして、魔法が未知の力である以上、うかつに手を出せない。

産業面でも問題が発生していた。

半導体などこれまで外国に頼りきりだった部品の供給が追いつかないのだ。

かつてからあった戦争で帝国は自力である程度の自給能力を持つ必要に迫られた。

だが全ての部品を製造できるというわけでもない。

ついに底を尽いてきたのだ。

景気は悪くなってきたおり、ここで失業者を増やすわけにもいかない。

帝国は少しずつ破滅の道を進んでいくのだった。

赤いトンボが雪空を飛ぶ      ? (後書き)

なんか微妙。次話投稿時に直すかもしれません。

赤いトンボが雪空を飛ぶ？

「魔法が存在しない？冗談は言わないで欲しいよ。」

テントの中では、目を覚ました緑髪の女性と話をしていた。

「魔法は存在しません。ですがわが国では科学が発達しており……」

そういつて諏訪は拳銃を出す。

「これは銃の一種で、連射は出来ませんが小型化に成功しており、うまく狙えば人を殺すことが出来ます。それに連射可能な機関銃やいろいろなありましてね……」

銃に関するうんちくを長々と語りだす諏訪。あまりの量に圧倒される女性と谷澤。

「ここまでにしておけ……疲れる。えっと……名を名乗っていなかったな。」

我々は大日本帝國海軍第三艦隊所属の谷澤という。階級は中尉。この銃マニアは諏訪。陸戦隊所属だ。」

「銃マニアじゃありません！」

と諏訪が怒る。

「はぁ……私はマルチダ。ただの貴族崩れのメイジだよ。」

「貴族崩れ・・・メイジとは？」

「魔法を使える奴らの事。それでそういうやつらは大体貴族と呼ばれている。そして貴族は平民を搾取して贅沢の限りを尽くす。あんたらそんなことも知らないのかい？」

「ところで、メイジはどんな魔法が使えるのか？教えてくれないだろうか？」

「はあ・・・たとえば、『ライト』」

彼女がそういうと、明かりが灯った。  
驚きを隠せない二人。

「では、先ほど貴方と交戦した時に出てきたあの化け物も魔法か？」

「まあ・・・私が作ったけど？」

「はあ・・・なんちゅう世界だよ・・・ところで国というものは存在するのか？我々はそこだけ話したい。」

「はあ？つてあんたら何するつもりだい？」

「貴方も知っていると思うが、日本には魔法が存在しない。かわりに科学が発達しているが、石油やら石炭やら鉄などが我々には欠かせない。というか、そういうものが無いと我々は滅びる。ということ、貿易をしてももらえないだろうかと思っただね・・・」

「残念だったね。あの貴族たちが魔法が使えない相手に対等に交渉すると思う？」

「思わないな。そしてそういう奴らほど無駄にプライドが高い。」

「よく分かっているじゃないの。ところで、私を何時までここに閉じ込めるの？」

「もう一つの目的は・・・あんと交渉がしたい。」

「はあ？何を交渉するんだい。」

「マルチダさん。貴方を我々のほうで雇いたい。」

諏訪とマルチダが訳が分からないという顔で谷澤のほうを見る。  
マルチダが口を開く。

「お断りだね。どんな仕事か知らされていない。それにあんと等は  
得体が知れない。」

「任務としてはこちら辺一帯の情報の提供と収集。給料は情報の質  
や量にもよるが、悪くはないはずだ。」

「何故私を？意味が分からないね。」

「あの馬鹿司令とぶつかった時、貴方は金貨やら銀貨を落とした。  
そしてそれに気付いた貴方は我々を始末しようとした。

普通ならそれを拾ってそのまま立ち去るはずだ。

だが貴方はそうしなかった。それが指し示す答えは貴方が盗賊やら  
何か危ない稼業に手をつ込んでいるということ。そういう仕事は  
国の裏側を知っている可能性が非常に高い。

そして、貴方の攻撃で我々に怪我人が出たこと。

本当はあれで報復射撃の対象となり射殺されてもおかしくはない。貴方の命は我々が握っているといつても過言ではないのだよ。

あと強いてあげるのなら・・・おそらく信頼できるという勘かな？凶悪殺人犯やらそこらへんの奴とは違うと思ったからな。

守る物があるというか、そんな目をしていたからな。」

沈黙。しばらくして、マルチダが笑い出す。

「・・・ハハハハッ・・・面白いね。分かったよ。その仕事受けてやるよ。それに、あんたが言っていたこと、ほとんど当たっているしね。」

「昔から人を見ることには自信があるんだよ。必要なものがあればこちらで手配する。我々は大体ここにいると思うし、来れる時に来てくれ。恐らく海軍中尉の谷澤いるかと言えば通してもらえるだろう。ではよろしく頼む。」

そう言った谷澤も、笑っていた。

## 赤いトンボが雪空を飛ぶ ? (後書き)

報復射撃・・・まあこんな感じでいいと思います。

マルチダさんが情報収集役で加入しました。

報酬は金塊だったりする。

今年の投稿は本当にこれで最後となります。

こんな駄文を読んでいただき本当にありがとうございました。  
皆様良いお年を。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6925z/>

---

赤いトンボが雪空を飛ぶ

2011年12月31日18時45分発行